

草（白居易）

離々たり 原上の草

一歳に一たび 枯榮す

野火 焼けども 尽きず

春風 吹いて 又 生ず

遠芳 古道を 侵し

晴翠 荒城に 接す

又 王孫の 去るを 送れば

萋々として 別情 満つ

離離原上草 一歳一枯榮
野火燒不盡 春風吹又生
遠芳侵古道 晴翠接荒城
又送王孫去 萋萋滿別情

解説 野原の草を主題に、送別の意を述べた詩。

語釈 ※離離||草がつかつかと生い茂っているさま。※枯榮||草木の茂ることと枯れること。※遠芳||遠くまで続く草のかおり。※古道||古い道。古くつくられた道。旧道。※晴翠||晴れた草原の緑色。※荒城||くずれかけた城壁。※王孫||王さまの孫。※萋萋||草のさかんにのび茂っているさま。※別情||別れの時の感情。きもち。

通釈 盛んに生い茂っている野原の草も、一年に一度榮え、そしてまた枯れる。冬になって野火に焼かれてもその根は尽きることがなく、春風が吹き出すとまた芽を出すのである。草の香は遠く古い道にただよい、晴れた日の草原の緑色はくずれかけた城壁に連なっている。また王孫の旅立つのを送るのであるが、草の生い茂る中に、離別の情が満ちあふれてくるのである。